

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K11531

研究課題名(和文) コーチング学の教育の質保証のための教育課程編成上の参照基準の作成とその実践

研究課題名(英文) Creation and Practice of Internal Quality Assurance Based on Reference Points in Coaching theory

研究代表者

青山 清英 (AOYAMA, Kiyohide)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：20297758

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、コーチング学の教育の質保証のための教育課程編成上の参照基準の作成とその実践について検討した。まず、各国のスポーツ指導者養成プログラムの現状を分析した。結果として、いずれの指導者養成においても、スポーツ指導者に必要不可欠な運動感覚能力の養成に関わる科目の設置が不十分であることが確認された。次に、体育・スポーツ学及び近接領域の教育学、心理学の「参照基準」を理論面と実務者養成の両面から比較検討し、コーチング学の教育の質保証における参照基準を検討した。結果、実践からの帰納による人間科学的な理論構築とそれに基づく実践知形成のための教育プログラムの構築とその評価が課題として見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、体育・スポーツにおいては、暴力や人権の問題が顕在化し、大きな社会問題となった。これに加えて、学校運動部活動の地域移行などが進められるなど体育・スポーツを取巻く環境は大きく変化している。そこで学校、社会、競技に関わらず大きな課題となっているのが、「スポーツ指導者の質保証」の問題である。わが国ではスポーツ指導者の質保証に関わる問題は倫理的・道徳的問題として検討されることが多いが、実際には他の専門能力の養成と一体的に捉えて取り組む問題である。本研究の成果は、このような課題を研究するための起点となるものである。

研究成果の概要(英文)：This study examined the development and implementation of curricular standards for quality assurance in coaching theory. First, the current status of sports coach's education programs in each country was analyzed. As a result, it was confirmed that all of the coaching programs lacked subjects related to the development of movement sensational ability, which is essential for sports coach. Next, the "curricular standards" of physical education, sports science, and the adjacent fields of pedagogy and psychology were compared from both theoretical and practitioner training perspectives, and curricular standards in the quality assurance of education in coaching studies were examined. As a result, the construction of a human scientific theory by induction from practice and the construction and evaluation of an educational program for the formation of practical knowledge based on this theory were found to be issues.

研究分野：コーチング学

キーワード：コーチング学 教育の質保証 スポーツ指導者 実践知

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

バスケットボールなどのスポーツ指導者のハラスメントの問題に対応するために、日本スポーツ協会によって「スポーツ指導者育成推進事業 2013」が進められた。この事業によって、「コーチング・イノベーション推進事業」としてスポーツ指導者育成のための「モデル・コア・カリキュラム」が作成された。また日本体育・スポーツ・健康学会では、日本体育学会体罰・暴力根絶特別委員会からの依頼により、大学体育問題特別委員会で「運動部指導者のためのコアカリキュラムの開発と新たな指導者資格制度の検討」が行われ、スポーツ指導者の資質・向上に関する議論が盛んに行われた。しかし、それ以後も問題は解決には至らず、2020年に国際的な人権団体である「Human Rights Watch」により、日本のスポーツにおける子ども虐待に関する報告書『数えきれないほど叩かれて』が発表された。このようなハラスメント問題に関してはいくつかの研究が行われているが、この問題は、スポーツ指導者の指導実践における質保証との関りから今日においても重要な課題であり、解決しなければならない問題として存在している。

このような状況の中、スポーツ指導者養成の中核的研究領域であるコーチング学においては、日本コーチング学会が、一般コーチング学の理論書『コーチング学への招待』を2017年に上梓した。その後、2019年には『球技のコーチング学』が発刊され、球技の一般理論が構築された。また、2020年には個別理論書となる『陸上競技のコーチング学』が日本陸上競技学会から刊行されるなど、スポーツ指導者養成のための中核理論であるコーチング学は、一般理論・類型理論・個別理論というような体系で整備され、その理論体系がまとまりつつある。

前述したようにスポーツ指導者養成のためのコーチング学の体系化は進みつつあるが、現在進行しているコーチング学の体系化においてはコーチング学の理論・内容面の整備が中心となっており、そこからコーチが身に付けるべき知識・素養や実践的指導力、そしてそれらの学習方法及び評価等についてはほとんど検討されていない。したがって、「教育の質保証」の観点からもこの問題について検討することが喫緊の課題となっている。

この問題の解決のスタートとしては、まず日本学術会議によって行われている「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準」を参考に検討することが必要である。体育・スポーツ学分野では、全国体育系大学学長・学部長会議により「体育・スポーツ学分野の教育の質保証における参照基準」がまとめられたが、これらは体育・スポーツ学分野全体を取り扱ったものであり、スポーツ指導者養成課程については、その概略にとどまっている。したがって、スポーツ指導者の質保証問題を「参照基準」から検討する場合には、その中核領域である「コーチング学」について検討することが求められる。また、検討にあたっては教育内容に関する「学問の特性」と「実務者養成」という側面を持つコーチング学の近接領域である教育学分野と心理学分野との比較検討も必要となる。

### 2. 研究の目的

前述のことから、現在の日本のスポーツ指導者養成プログラムは、欧米と比較してどのようになっているか、そこではどのような理論と方法によって実践的指導力を養成しているのか？

「教育の質保証」を「学問の特性」のみならず「実務者養成」の側面からみた場合、理論と養成はどのような関係にあるのか？といった問題の検討をふまえた「コーチング学における教育の質保証のための教育課程編成上の参照基準」の作成が喫緊の課題となってくる。

本研究はスポーツ指導者養成教育に向けた「コーチング学における教育の質保証のための教育課程編成上の参照基準」を作成し、専門職としてのスポーツ指導者養成のために有効なプログ

ラムの開発を行い、ハラスメント等の社会問題に寄与することを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究は次のような手順で行われた。まず、日本と欧米（英語圏・ドイツ語圏・ロシア語圏）のスポーツ指導者養成プログラムの内容を文献調査により分析し、さらに当該プログラムの受講方式（アクティブラーニング等）、運用方法（単位認定方法等）について検討することによってスポーツ指導者養成プログラムの全体像を明らかにした。続いて、体育・スポーツ学の「参照基準」と近接領域であり、実務者養成を含む代表的な学問領域として「教育学」と「心理学」における「参照基準」について、「学問の特性」と実務者養成、それぞれの観点からその特徴を整理した。そして、コーチング学における「参照基準」を日本コーチング学会より刊行した。

### 4. 研究成果

#### (1) 各国のスポーツ指導者養成プログラムの特徴

スポーツ指導者養成プログラムの検討では、日本に関しては日本スポーツ協会の『モデル・コア・カリキュラム』と日本オリンピック委員会の『ナショナルコーチアカデミープログラム』を、英語圏に関しては、国際コーチングエクセレンス評議会の『International Sports Coaching Framework』を、ドイツ語圏については、ケルン・コーチアカデミーの『ケルン・コーチアカデミー・テキスト』を、ロシア語圏については、ウクライナの『オリンピックスポーツのコーチングプログラム』を分析対象とした。分析の結果、西側諸国と東欧的なスポーツ指導者養成の考え方の違いが見えてきた。特に、スポーツ指導者の能力として決定的に必要な技術、戦術、体力のトレーニングのプランニングやその方法論については大きな差異があるといえる。それは、ピリオダイゼーション理論のとらえ方にあるといえる。西側諸国では、競技力を構成する各要素や栄養など補助的な要素の個別的な理論が採用されているのに対して、東欧ではそれらを帰納的・統合的にとらえてピリオダイゼーションが構成され、それらを個別諸科学の知見がサポートするシステムになっている（ボンパ、2006）。今後、我が国においてもこれらのような観点をコーチ教育に取り入れる必要があるのではないかと。一方で、いずれのプログラムにおいても、スポーツ指導者の実践知養成に関するものはほとんど取り入れられていなかった。したがって、各国の指導者養成プログラムのあり方をふまえると、スポーツ指導者の実践知や身体知の教育プログラムの構築と評価が重要となる。

#### (2) 体育・スポーツ学、教育学、心理学の「参照基準」の比較

体育・スポーツ学、教育学、心理学の「参照基準」の内容面について比較してみると、学としての共通の特性としては、学際応用科学であること、学問の知と臨床（実践）の知を双方向的に探究すること、他の諸学との協働を志向していること、社会的課題の解決への志向性があることが認められた。また、実務者養成の観点からは、三領域共に学として実践への志向性があるため、実際の現場における実践に関する演習・実習は重視されていた。形式としては、課程内の科目としてのみならず、課程外としてのボランティア、インターンシップなどが用いられ、アクティブラーニング形式の教育が推奨されていた。

#### (3) コーチング学の「参照基準」の提案と課題

ここではコーチング学の「参照基準」について、「分野の定義・特性」を提示するとともに、実務者養成における課題を明らかにしておきたい。

日本コーチング学会は、2017年に我が国初の一般コーチング学の理論書となる『コーチング学への招待』を発売した。このなかでコーチング学の定義・特性についてまとめている。ま

ず、コーチング学とは「スポーツの練習(トレーニング)と指導に関する理論」であるとされている(日本コーチング学会編、2017、 )。この理論は、狭く競技スポーツに限定されるのではなく、教育・健康・レクリエーションなどの多様な目的で行われるスポーツを対象としている。さらに、コーチング学は、既成科学の研究成果を応用してスポーツをする人や指導者の活動をサポートすることに主眼を置くのではなく、スポーツの現場で獲得された個別的・経験的な知見を帰納的に集約し、体系化することをめざす、という特性を有している(日本コーチング学会編、2017、 )。したがって、体育・スポーツ学、教育学、心理学とは、 学際応用科学という特性、 学の実践への志向性、という点で共通性が認められる。次に、実務者養成についてであるが、我が国のコーチング学においては、指導者養成のプログラムに関しては、青山(2017)などの報告があるがあまり検討されていない。近接領域のスポーツ運動学においては、指導者養成カリキュラムの内容は、 運動諸科学の知識の獲得、 教育学的指導方法論に関する知識の獲得、 運動技能の獲得の三点にまとめられている(金子、2005、p.275)。このなかでは の運動技能の獲得に関しては、実技実習を通して身につけられるべき課題に重大な欠落があると指摘されている(金子、2005、p.275)。先に確認した各国のスポーツ指導者養成プログラムの特徴の結果とあわせて考えると、指導者の実践的能力の養成のために求められる実践知の体系的習得をどのようなプログラムとして実現するのかという問題とその実践知の査定方法論について検討することが必要となる。そのためには、金子(2005、pp.68-71)が提示している実技実習の三階層のうち、第二段階の動感自己観察能力を高める実技実習のあり方と第三段階の動感他者観察を通して、運動の形成位相の査定能力を身につけるための実技実習のあり方を検討することが、コーチング学の「参照基準」を作成するための課題として残された。このためには、スポーツ指導者の質保証の観点から、金子の言う第二、三段階における学習者の学びの構造が検討されねばならない。

#### [ 参考文献 ]

青山清英(2017)スポーツ指導者養成機関のスポーツ指導者教育における理論知と実践知、教師教育と実践知第2巻、pp.51-57.

ボンバ；尾懸貢・青山清英監訳(2006)競技力向上のトレーニング戦略、大修館書店、pp.158-160.

金子明友(2005)身体知の形成(下)、明和出版.

公益財団法人 日本オリンピック委員会(2014)、平成26年度JOCナショナルコーチアカデミー実施要項

Köln Trainer Akademie(1988) Studienbrief der Trainerakademie Köln des Deutschen Sportbundes.

Магістерська програма(2015) Тренерська діяльність в олімпійських видах спорту, Київ.

日本学術会議心理学・教育学委員会(2014)大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 心理学分野.

日本学術会議心理学・教育学委員会(2014)大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の  
参照基準 教育学分野.

日本コーチング学会(2017)コーチング学への招待、大修館書店.

全国体育系大学学長・学部長会(2011)体育・スポーツ学分野の教育の質保証における参照基準.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 高信清人, 松原拓矢, 伊佐野龍司, 関慶太郎, 小針幸世, 青山清英	4. 巻 2
2. 論文標題 大学との連携によって実施した中学校体育授業に関する事例的研究: 投能力向上のための学習プログラムについて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大学地域連携学研究	6. 最初と最後の頁 23-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Seki K., Nagano T., Aoyama K., and Morioka Y.	4. 巻 86
2. 論文標題 Squat and countermovement vertical jump dynamics using knee dominant or hip dominant strategies	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Human Kinetics	6. 最初と最後の頁 63-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 菊池翔太, 関慶太郎, 榎英彦, 青山清英	4. 巻 129
2. 論文標題 円盤投におけるサークルの大きさが投動作に与える影響	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 陸上競技研究	6. 最初と最後の頁 24-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 青山清英, 青山亜紀	4. 巻 36
2. 論文標題 測定スポーツの分類に関する一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 コーチング学研究	6. 最初と最後の頁 15-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 本道慎吾、青山清英ほか3名	4. 巻 128
2. 論文標題 ハードル走におけるインターバル疾走中の支持脚各部の動作と機能に関するバイオメカニクス的研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 陸上競技研究	6. 最初と最後の頁 24～32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高信清人、関慶太郎、青山清英	4. 巻 128
2. 論文標題 落下高が同水準であるリバウンドジャンプとドロップジャンプの下肢バイオメカニクス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 陸上競技研究	6. 最初と最後の頁 14～23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 高信清人、松原拓矢、伊佐野龍司、関慶太郎、小針幸世、青山清英
2. 発表標題 大学と学校における体育授業の連携に関する一考察 中学生の投能力向上のための授業を対象として
3. 学会等名 大学地域連携学会第2回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kiyohito Takanobu, Keitaro Seki, Kiyohide Aoyama
2. 発表標題 Effectiveness of a learning program to improve throwing techniques for junior high school students
3. 学会等名 22nd International Symposium : Evidence-Based Practices for Elite Sport (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青山清英, 青山亜紀
2. 発表標題 コーチング学における教育の質保証に関する学問論的課題
3. 学会等名 日本コーチング学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 菊池翔太, 富永翔太, 関慶太郎, 青山清英
2. 発表標題 観察的動作評価法を用いた記録向上に伴う円盤投動作の評価に関する実践報告
3. 学会等名 日本コーチング学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 青山亜紀, 青山清英
2. 発表標題 「トレーニング・ピリオダイゼーション」理論の歴史的展開と今後の課題
3. 学会等名 日本コーチング学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青山清英
2. 発表標題 測定スポーツの分類
3. 学会等名 日本コーチング学会
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 青山清英
2. 発表標題 大学におけるスポーツ指導者養成教育と地域スポーツ指導者の質保証
3. 学会等名 大学地域連携学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------